



葬祭場での通夜の様子。
中央にはデジタルフォトフレームの大きな遺影がみえる
(筆者撮影)

冠婚葬祭にまつわるマナーやしきたりといったものも、実は「所変われば品変わる」もので、地域によって驚くような違いがある。例えば、通夜・葬儀と火葬の順序について、県内や東北に住んでいた方は、他県の人から驚かれた覚えがあるのではないだろうか。青森県では通夜、葬式の前

に火葬を行うが、関東地方や近畿地方では葬儀のあとに火葬が一般的である。死亡の知らせを受けて、遠方から駆けつけたらもうお骨になってしまっていた、といった嘆きもしばしば聞かれる。

こうした火葬のあとに葬儀を行い、祭壇にはご遺体ではなくお骨を置くやり方

を、分類上では骨葬、遺骨葬や無遺体葬ともいう。東北地方や四国、九州でも見られる習慣で、近代以降に火葬が一般化したことを背景にしている。

現在のようないくつかの公営火葬場での火葬が当たり前となる以前には、クサヤキなどと言って露天での薪やわらでの野焼きや、土葬が行われていた。森山泰太郎氏の調

査事例を引くと、1950(昭和25)年に津軽5郡の34か町村で調査した結果、2か村を除き土葬か、土葬と火葬の併用。火葬を行っている30か町村のうち、公営火葬場に行くのが13か町村、村内で焼くのが17か村であったという。また、明治以後、死体の処理について火葬は文明的であるときとされて、火葬場の設置とともに

に都市から次第に村落にこの風習が及んでいったとも指摘している(『津軽の民俗』)。
『青森県史 民俗編』でも、県内各地域での葬送儀礼における近代以降の大きな変化容として、葬式日程の変化に注目した。例えば、今別町の例では、出棺(火葬)↓通夜・葬式の順番は1965(昭和40年)頃から。

は、その間に遺体が傷むことを懸念して先に火葬が行われるようになったのではないかと考えられる。また、葬祭業者が参入し、自宅から会館や寺院へと葬儀の場が移行して、「ナマボトケ」での搬入を拒否するといった新たなタブーの感覚が表面化してきたとの指摘もある(鈴木岩弓「霊と肉と骨」)。

遺骨葬と葬送の現在

福島 春那

(県民生活文化課
県史編さんグループ非常勤嘱託員)

期や漁の多忙なときには火葬後に葬式をすることがあったという。

一方、どうして東北地方には骨葬の習俗が色濃いかという疑問が残る。骨葬を採用した理由として、聞き取り調査からは今別町

での例のように、時間的な利便性や衛生性があげられ、土葬の頃から比較的長い通夜を行っていた東北地方で

「微笑んでいる」にも「厳しい顔」にもなると涙ぐんでいた。葬送儀礼、慣習は故人を悼む思いに寄り添い時代や地域差により変わりゆく。これを通して「死」の観念を探ることは、翻って同時代の「生」への眼差しとなるだろう。